

この度の在外研究（2022年9月4日～2023年9月3日）では、長年取り組んできた T. E. ロレンスについて、彼の母校オックスフォード大学所蔵の資料等を利用し、一層深く研究を進めることを目的とした。ロレンスのみならず、彼と交流のあった同時代の文学者——ジークフリート・サスーンやウィルフレッド・オウエンといった第一次世界大戦における戦争詩人、あるいは「ジョージ朝の詩人たち」（Georgian Poets）、バーナード・ショー、E・M・フォスターなど——との関係にも焦点を当て、従来の英文学史では埋もれてしまうような一面を新たに捉えなおすことを試みた。また、「戦争文学」という文脈のなかでロレンスを再考すべく、1920年代の戦間期や第二次世界大戦における戦争と文学（芸術活動）の関係にも視野を広げ、現地調査や資料収集に励んだ。以下、主要な研究活動を振り返りながら報告したい。

1. 2022年9月23日～25日の3日間、オックスフォード大学キープル・カレッジで開催されたシンポジウム（T. E. Lawrence Society 主催）に参加した。3日間にわたって、会員や招聘研究者の発表を聴き、非公開の貴重な資料を特別に閲覧する機会にも恵まれ、大変有意義な経験となった。さらに、会場で販売されていた入手困難な機関誌や資料を多数購入することができたのも大きな収穫だった。ロレンスに関する書籍は、日本国内ですでにかなりの量を収集していたが、こうした機関誌や資料はなかなか手に入らず、しかも、驚くことに、シンポジウム中ということもあり、ほとんど無料で配布されていた（会員は少し寄付をすれば、好きなだけ持って帰ることができた）。まさに、現地ならではの研究・調査をすることができた。このシンポジウム以外にも、オックスフォード大学所蔵の資料を閲覧する機会が何度かあった。メーリングリストに登録していると、案内が届き、講演を聴くことができたり、期間限定で特別公開されている特別展を見ることができたり、ロレンスを研究するには、本当に素晴らしい環境だった。

2. まだ訪れたことのなかったパリの「軍事博物館」に行き、第一次世界大戦に関する詳細な展示や資料に触れることができた。イギリスと違い、実際に戦場となったフランスでは、第一次世界大戦はどのように認識されているのか（一般的にどのように紹介されているのか）を確認したいと思っていた。また、第一次世界大戦後、パリ講和会議に参加したロレンスは、シリアをめぐるフランス側の思惑と対立したため、当地では反ロレンス・キャンペーンが行われた。フランスとの関係を重視するイギリス政府にとって、ロレンスは邪魔な存在となり、最終的に彼は政治的敗北に追い込まれる。このような経緯から、フランスでロレンスがどのように受容されているのかにも興味があった。軍事博物館では、詳細な地図や図版を参照することができ、残念ながら、ロレンスに関する展示はあまりな

かったものの、軍服や武具（武器）、さらに充実した映像資料もあり、一日じっくり見て回った。

パリ来訪のもうひとつの目的は、第一次・第二次大戦を主題にした英仏の文学作品を比較すべく、資料収集を行うことだった。特に、第一次世界大戦終結から第二次世界大戦勃発までのいわゆる戦間期（1920年代）において、パリ前衛芸術の花形といわれたナンシー・キュナード（イギリス出身、1896-1965）を調べたいと考えていた。オックスフォードの本屋において、出版されたばかりの彼女の伝記（*Five Love Affairs and a Friendship: The Paris Life of Nancy Cunard, Icon of the Jazz Age*）を購入していたこともあり、彼女に関する資料を集め始めていた。イギリスの古本屋でもすでに何冊か購入していたが、彼女の活動拠点だったパリで、新たな資料を発掘するのが目的だった。

シュルレアリストをはじめとした芸術家との関わり（特に、ルイ・アラゴンやパブロ・ネルーダといった詩人との出会い）、ファシズムや人種差別との闘い（自身の印刷所での出版活動、スペイン内戦に関して作家や詩人たちに行ったアンケート、黒人運動との関わりやパンフレット発刊といったジャーナリスティックな活動）——これら非常に多岐にわたる彼女の活動を見通すために、書店や図書館に通い、資料収集に励んだ。以前、キュナードに関する展覧会を開催した「ケ・ブランリー美術館」にも足を運び、関連書籍・資料を探した。

在外研究を終え、帰国後すぐに、雑誌「サンデー毎日」でネルーダに関する連載小説が掲載されており、キュナードにも多くの言及があることを知った。さらに、アフリカ哲学の文脈で、反植民地主義・反人種主義の社会活動を行った人物として、キュナードの名が挙げられており、彼女の著作活動が注目を集めていた（日仏会館創立100周年記念 日仏シンポジウム「両大戦間期フランスの表象——女性、戦争、植民地」における中村隆之先生の発表）。こうした動きを参考にしながら、特にキュナードとスペイン内戦の関係について、今後研究を進めたいと考えている。

3. ナチス・ドイツの高官ラインハルト・ハイドリヒ（1904-1942）の暗殺事件については、これまで比較的多くの映画が製作されている。ブレヒトが原案と脚本に関わったことでも有名な『死刑執行人もまた死す』（1943）をはじめ、『ヒットラーの狂人』（1943）、『暁の七人』（1975）、『ハイドリヒを撃て』（2016）、『ナチス第三の男』（2017）など「エンストラポイド作戦」は繰り返し描かれてきた。なぜこの事件が繰り返し描かれるのか、戦争（ナチズム／ファシズム／抵抗運動）がどのように表象されているか、ハイドリヒとチェコ人部隊の人物造形にはそれぞれどのような違いがみられるのか——これらを考察したいと思ってきたが、やはり現地での調査が欠かせないため、在外研究中に、何としても、プラ

ハを訪れようと計画していた。今回、作戦の実行部隊が最後に逃げ込んだ「聖ツィリル・メドデイ正教大聖堂」を訪れ、併殺された「国立ハイドリヒ事件英雄記念館」にて、当時の事件資料にれた英語文献しか参照できなかったが、チェコ語の資料も入手することができたので、翻訳アプリなども利用しながら、どうか読み解いていきたいと考えている。大変有意義な調査旅行となった。

4. 1944年にナチスによって破壊され、いまま当時の姿のまま残されているフランスの「オラドゥール・シュル・グラヌ」村に行った。3の教会同様、この村も在外研究中に何としても訪れ、自分の眼で見たいと思っていたところである。ハイドリヒ暗殺後、報復として、実行部隊をかくまったとみなされた「リディツェ村」で村民の虐殺事件が起き、村が徹底的に破壊しつくされたのと同様、このオラドゥール・シュル・グラヌも、ナチス将校を襲って捕らえたレジスタンスがいる村だとされ、村人 643 名が虐殺された。第二次世界大戦後、自由フランス軍のドゴールは、破壊された村をそのまま残すように決め、村は、現在なお当時の凄まじい状況を伝えている。しかし戦後 80 年経ち、その遺構は、いまや廃墟になりかねない。長い年月は、戦争による暴力と破壊の痕跡をも覆い隠すかのようだ。そのため、資料収集も大切だが、まずは実際に訪れ、自分の眼に焼き付けなければならないという危機意識があった。「戦争」文学を研究テーマにするうえで、3と4の訪問は長年の悲願であり、それについて書くことは、在外研究後の自分にとって大きな課題である。ぜひ、調査を続け、論説を発表したいと思っている。

5. 19世紀英文学とグランド・ツアーの関わりについて考察を深めたいと思い、ヴェネツィアに行き、美術館や本屋をめぐり、資料収集に励んだ。これまで戦争文学を中心に研究をしてきたが、今後はグランド・ツアーを研究対象とし、特に、ジョージ・ゴードン・バイロン、ジョン・ラスキン、ウォルター・ペイターに焦点を合わせて考察をする予定である。T・E・ロレンスに取り組むなかで、彼の愛読書だったウィリアム・モリス、さらにモリスに大きな影響を与えたラスキン、また、社会主義運動のなかでモリスと意見の相違があったバーナード・ショー（ショーはロレンスを精神的に支えたことでも有名）、これらの人物についても研究を進めてきた。ロレンスを中心とした、新しいひとつの英文学史というものを描きたいという大きな夢があり、ラスキンから始まる系譜もたどっていききたい。

6. ロレンスと英国の詩人・劇作家ジェイムズ・エルロイ・フレッカーとの交友関係について調査し、詩誌にフレッカーの詩の翻訳と紹介記事を書いた。第一次

世界大戦後、ロレンスは 8 年かけて 112 篇の詩を書き溜め、自選アンソロジーを作った。彼はそれを「短調の名詩選」とし、フレッカーの詩も 4 篇収録した。二人には多くの共通点があり、大戦前にはベイルートで会ってもいる。上記記事では、これまであまり取り上げられることのなかった両者の交流に注目しながら、フレッカーの詩を読み解いた。フレッカーの作品を含む“Georgian Poetry”の特徴としてよく挙げられるのが、自然への憧憬、日常における美などである。戦争詩人のひとり、ウィルフレッド・オウエンもまた「ジョージ朝詩人」とされるが、彼は「戦争の哀れみ」をうたった。大量殺戮兵器を前に、無力感にうちめされて心を閉ざし、「無感覚」となった兵士たち。同じ苦しみのなかにいたオウエンが、彼らに対し怒りを表明するのは、「現実」への参入をあきらめないからである。戦争を非日常として切り離したりはせず、ここから詩を生み出すからである。フレッカーは身体が弱く、戦争には行かなかったが、自身に迫りくる死を見つめながら詩作を続けた。フレッカーの作品は、現在、日本ではほとんど読まれることはなく、また本国イギリスにおいても、近年、伝記や研究書は出版されていない。こうした状況ゆえ、研究することは難しいが、詩の翻訳は今後も続けてみたいと考えている。